# Artist In School

## 学校にできること
## アーティストにできること

札幌アーティストインスクール事業
おとどけアート2019記録集

発行　おとどけアート実行委員会
企画・編集　一般社団法人 AISプランニング

## もくじ


01　おとどけアートってなに？　p4
02　2019年度開催プログラム概要　p5
03　もみじの丘小学校 × 松田朕佳　p6
04　手稲北小学校 × 斉藤幹男　p10
05　美しが丘緑小学校 × 森迫暁夫　p14
06　おとどけアート実行委員会について　p22
07　2019年度アーティスト・イン・スクール関連事業　p23
08　これまでの活動実績　p24


## はじめに

2008年度にスタートしたおとどけアートは、学校という場を媒体としてアーティストの多様な価値観や生き方を表現することで、人と人、人と環境を結びつける新たなきっかけとなることを目指し、活動を展開してきました。

当初より「コミュニティーとは？」をキーワードに、「学校のもつ機能の拡張」「地域の拠り所を生み出す場づくり」を目的とし、アーティストの派遣をきっかけに子どもと子ども、子どもと教職員、さらに学校と地域の出会いや交流の充実を視野に活動を展開し、昨年度までに札幌市立小学校32校で実践を重ねることができました。活動を開始してから12年目を迎えた、「学校の日常って？」「社会の中の学校って？」など原点とも言える疑問に目を向け、おとどけアートが「学校」という場で活動する意義を再考しながら現在に至っています。

おとどけアートは“いつもの学校”に、ある日突然大人の転校生（アーティスト）がやってきます。転校生は子ども達と同様に朝から登校し放課後まで活動をします。時々学習をのぞいたり、一緒に給食を食べたりしますが、いつも校内で接している友達や教職員ではない“不思議な大人の転校生”との出会いは子ども達にとってこれまでに経験したことのない時間や空間や活動をもたらします。
アーティストとの出会いは芸術をより身近に感じることに留まらず、ものの見方や考え方をゆさぶられ、学年学級さらには学校を超えたコミュニケーションが生まれ、子ども自身がもつ創造性や可能性が引き出されることが期待されます。

実施校は公募により決定し、今年度は美しが丘緑小学校・手稲北小学校・もみじの丘小学校の3校で行いました。
活動にあたっては事前に学校と話し合いをし、学校の特色や実態、おとどけアートに期待することなどを踏まえてアーティストの選定を行います。実施した3校は地域環境・歴史・学校目標や教育活動の特色はそれぞれ異なりますが、派遣されたアーティストは学校や地域がもつ環境や子どもに対する夢や期待を理解し、そこでの可能性を追求することに努めました。活動にあたってはあえてゴールを設定せずに、子ども達や先生方の反応とアーティスト自身のもち味をどのように織りなしていくかを考えながら柔軟に展開したり、2度目の転校生となって1度目とは全く異なる活動を生み出していくアーティストがいたりすることも特色となっています。
限られた開催期間ではありましたが、この度“この学校とこのアーティストだからできた”活動の様子を報告書としてまとめました。

2019年度の活動報告書の発行にあたり、ご協力をいただいた学校の教職員、アーティスト、そして本事業の運営に携わる関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、これからも私たちは“いつもの学校”の中に子どもとアーティストの出会いの場をつくり、子ども達に新たな価値観や学びが生まれることを願い活動を進めてまいります。

おとどけアート実行委員会
委員長　池田悦子

# おとどけアートってなに？

おとどけアートとは、アーティスト（芸術分野で活躍する人たちの総称）が小学校に一定期間通い、余剰空間をアトリエとして創作活動を行うという事業です。基本的に中休み・昼休みに交流を行うため、授業カリキュラムには影響を与えません。またアーティストは講師としてではなく転校生としてやってきて、子ども達と共に休み時間に遊んだり、時に授業に参加したり、給食を食べたりするなど、一時的にですが小学校の一員として過ごします。その中でアーティストは子ども達にとって「少し大きな友達」のような存在になり、信頼関係を育みながら創作活動を行います。この活動を通じて、子ども達がアート作品やそれを生み出すアーティストという生身の人間と出会い、新たな価値観や生き方を知る機会を提供します。またこの活動は参加するアーティストにとっても現在の小学校や子ども達と触れ合うことのできる貴重な経験の場として位置づけられています。

※この活動は「アーティスト・イン・レジデンス（AIR）」という一定期間、住居と制作場所を提供するアーティスト支援プログラムを雛形にしているため、その小学校版として「アーティスト・イン・スクール（AIS）」とも呼ばれています。

アーティスト・イン・スクールブログ　https://inschool.exblog.jp/

# 2019年度開催プログラム概要

## 札幌市立もみじの丘小学校 × 松田朕佳

アーティストの松田朕佳さんが、約3週間小学校に通い「小学生になる（近づく）」ことを根底のテーマとした創作活動を行いました。活動は、主に子ども達や先生方と休み時間や、授業時間を共に過ごす中での対話から始まりました。その活動の中で発見したテーマを基に、子ども達や先生方の体のシルエットから数十体の「うちゅう人」を制作、そのうちゅう人たちがパレートを行う「うちゅう人のまえならえ」というパフォーマンスを行いました。また、アトリエとして使用した空き教室を、隣の3年1組を模倣したしつらえに変化させ、うちゅう人たちが過ごす「コピー3年1組」という架空の教室を生み出し、お披露目をしました。

開催期間　2019年11月25日（月）～12月20日（金）＊作品展示期間 12月20日（金）～12月25日（水）
参加人数　教職員23名、児童267名、保護者約30名
活動場所　空き教室

ブログ「札幌市立もみじの丘小学校 × 松田朕佳」

## 札幌市立手稲北小学校 × 斉藤幹男

アーティストの斉藤幹男さんが、子ども達に上靴をつくってもらったり、活動場所の「アイコン」を考えてもらったりの活動をしながら、学校にいる人との関係性を構築していきました。活動場所となった空き教室には、日々のコミュニケーションの中で見つけた魅力的な要素を展示したり、その場所が一人一人の好きな創作活動が行えるような創造的な空間となるよう試みました。活動の最終日には、”一緒に何かをする”という体験を共有するため、手稲北小学校の特色でもあるスイカを用いたイメージソングを発表し、集まった子ども達と合唱を行いました。

開催期間　2019年11月11日（月）～11月22日（金）
参加人数　教職員23名、児童357名、保護者約30名
活動場所　空き教室

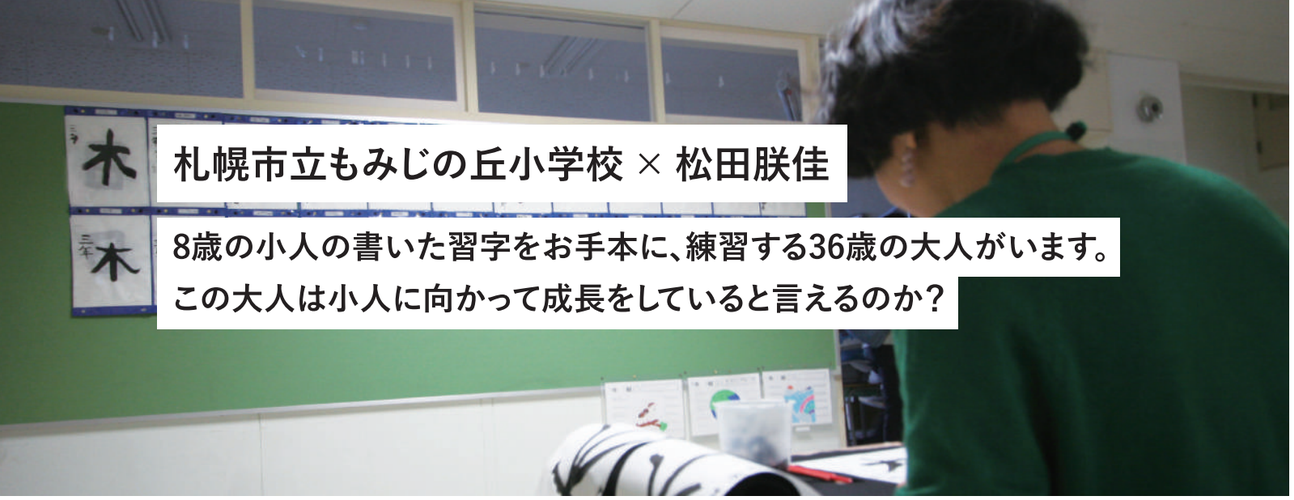
ブログ「札幌市立手稲北小学校 × 斉藤幹男」

## 札幌市立美しが丘緑小学校 × 森迫暁夫

空き教室をアトリエにした創作活動を約3ヶ月間に渡って行いました。アトリエには、森迫さんの作品が通う度に展示、追加されていき、それと共に子ども達がアトリエ内に設置された画用紙や壁面を絵や文字・折り紙などで装飾・上書き更新することで、特別な空間が出来上がりました。
また、校内での作品展示『森迫記念美術館』や手袋人形の制作やシルクスクリーン体験といったワークショップに加え、授業や行事への見学・参加といった関わりも生まれるなど様々な形で交流が行われました。

開催期間　2019年10月1日（火）～12月16日（月）
参加人数　教職員18名、児童176名
活動場所　空き教室

ブログ「札幌市立美しが丘緑学校 × 森迫暁夫」



# 札幌市立もみじの丘小学校 × 松田朕佳

## 8歳の小人の書いた習字をお手本に、練習する36歳の大人がいます。この大人は小人に向かって成長をしていると言えるのか？

もみじの丘小学校に3週間（計14日）通いました。コーディネーターの漆さんと花田さんとともに。

まず初めに、小学校というのは「小さい学校」なのか、「小さい人が通う学校」なのか。とにかく「小学校」に対して私は大きくなりすぎていました。私が小学校に通うことは小さくなることを学ぶことでした。

「大きくなったら何になりたい？」

これは大人から子どもにされる質問です。あたかも子どもが、大きくなる手前の準備期間のように捉えた質問です。子ども達の側で過ごしていると、人は子どもの時間を過ごすために生まれてきたのだな、ということを改めて考えます。大人になる手前が子どもなのではなく、子どもとして過ごした時間の余波として、大人として過ごす時間があるのだということ。子どもの時間を大人になる為の準備期間として使ってしまっては本当に勿体無い。そして大人になった私が小学校に通うなら、子ども達が大人になる為に学ぶ授業ではなく、子どもであることを習いたい。授業をサボる子や間違った答えを言わないように先生の顔色を伺う子の緊張感から学びたいと思いました。怒られたくない。褒められたい。私をみて、私をみて、と一生懸命大人の真似をする子ども達の素直な心を習いたい、と。虫眼鏡のように拡大された世界を見ている子ども達。色々なものが大きく見えるから、大きな大人を怖がったり、小さな虫に気を取られたりしていました。数分に一度甲高い声で叫ばないといけないほどエネルギーを持て余していて、用もないのに走り回って、ドキドキドキドキ、目の前のことに心を動かされるがまま。私は子どもになりたくて、子どものように振る舞えるようになりたくて小学校に通いました。子ども達は、教養を身につけるために小学校へ通います。私はこれまでの人生で習得した教養を払い落としながら、子どもから学びたいと思いました。そして、この学びの場で小さい人は大きく、大きい人は小さくなれないものかと考えたのです。

図1をご覧ください。数直線上に8歳と36歳を置きます。0歳から成長して数直線の数が大きい方へ進めば歳をとっていくという図です。これは私たちが日頃体感している時間の流れです。今日の次に明日があり、昨日に戻ることはできません。いくら、数直線の時間軸に左向きの矢印を描いたところで時間が逆に流れることはないでしょう。

図1

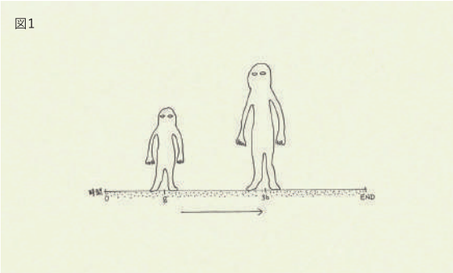


図2

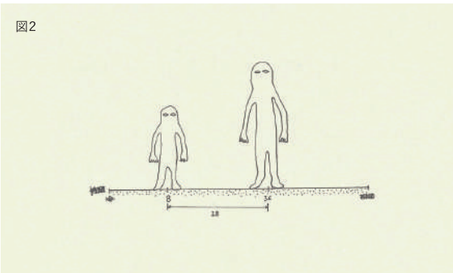


図2は方向性を表す矢印がありません。8と36の差が28であることを表しています。8歳がいずれ36歳に到達する。36歳は8歳を過去に通過した。こういうことを考えずに図2を見ると、8歳と36歳はお互いに28歳離れているとシンプルに言えます。ここで問題です。

8歳の小人の書いた習字をお手本に、練習する36歳の大人がいます。この大人は小人に向かって成長をしていると言えるのか？

先生の書いた習字の文字を真似することは子どもにとって、とても難しいことです。そのことを理解する為に、私は小学3年生（8歳）の書いた習字を真似しました。子どもの、筆圧が強くてコントロールが効かない手先を真似するのは本当に難しいことです。子どもの息遣い、走り回りたい衝動を抑えて椅子にじっと座ることに耐えながら小刻みに震えるエネルギーが、線の中に見えてきます。ハラハラドキドキするような線を引くことを、真似することで学ぼうとしました。無意識のうちに、スッと一本つまらない線を引いてしまわないように気をつけなければなりませんでした。
もう一度、図2を見てください。この二つは28年離れています。私も子どもも、お手本とする文字から同等の距離が開いているのです。私が子どもの書いた文字を真似することに費やした苦労と、同等の苦労を子ども達は費やしたのではないでしょうか。その点において私と小学3年生は同等。子どもに向かって成長した、とは言えませんが、成長という尺度を外した場合、8歳と36歳はこの習字というタスクに対して同等の努力を要する＝8歳と36歳は同等である。8歳は子どもである。

8歳は子どもである
8歳と36歳は習字というタスクに対して同等の努力を要する＝8歳と36歳は同等である
8歳＝36歳
36歳は子どもである

こうして、36歳の私は子どもである、ということが成立しました。

その後、『うちゅう人のまえならえ』というタイトルで、「子どもの目線に合わせる」ということを実際にやってみるとどうなるか試してみました。重力の制約を外し、地面からの測定方法ではなく目線を揃えてみた（図3）。

これが一体なんなのか。私自身まだわからないのです。こちらは本当のナンセンス（non-sense, 無意味）なのかもしれません。

図3

最後に。「おとどけアート」の3週間には感動的な出会いがあり、感傷的な最終日のお別れがありました。子どもたちを取り巻く環境、すなわち私たち大人が作っている社会が、子どもをどのように位置付けて考えているかが見えました。子ども達がアートを学べる社会であって欲しいと願います。そして、アーティストにアートを教えるチャンスを作ってくれた、「おとどけアート」に感謝しています。

このプロジェクトのロジックがあまりにも唐突だったという方の為に、参考文献を二つ記載しておきます。


レイモンド・M・スマリヤン(1978)『この本の名は？：嘘つきと正直者をめぐる不思議な論理パズル』日本評論社
宗宮喜代子(2001)『ルイス・キャロルの意味論』大修館書店

松田朕佳 / Chika Matsuda
（アーティスト）


1983年生まれ。長野県信濃町在住。 高校卒業後、ニュージーランドに渡りNelson Marlborough Institute of Technology語学コースを専攻。2年目からヴィジュアルアートコースに転専攻しコンテンポラリー・アートに出会う。2006年にBachelor of Art を取得後、担当教員の卒業校であるアリゾナ大学大学院に推薦を受け渡米。彫刻科に在籍し2010年にMaster of Fine Artsを修了し日本に一度帰国するが、その後もアメリカ、ヨーロッパのアーティスト・イン・レジデンスで制作、発表を続ける。2015年、エンジニアを含む異業種からなるユニット「耳のないマウス」を結成し、2017年にはユニットとしての作品で「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 」にて 審査員賞を受賞。個人では、2018年4月にトーキョーアーツアンドスペース二国間交流事業プログラムでカナダ・モントリオールにあるアートセンター Centre CLARK に3ヶ月間招聘される。「彫刻とは空間（物理的、意識的な）への働きかけである」を念頭に置き、主に立体作品を制作。作品を介して世界に普段とは異なる解釈を与え、日常を問い直す作業をしている。
https://www.chikamatsuda.com

# 曖昧な場の可能性

「小学生になってみる！」と宣言したアーティストは、明確なプランはあえて持たないまま、様々なクラスを訪問し、ある時は教室の後ろから授業を眺め、またある時は席について授業を受け、毎日給食も一緒に食べた。授業が終わればそのクラスの児童や先生と、授業の中身のことや日常の活動について積極的にヒアリングをしていった。

活動も3日が経過した頃だろうか。アーティストは、様々な対話の中から、人間の成長に関わらず、ほぼ変わらないものが人間にはあることを発見した。それは、眼球の大きさであった。眼球の大きさは、成長に伴って大きくなり個人差が出てくる他の部位とは異なり、ほぼ変化しないという。
またアーティストは、その発見と同時期に、クラスや集団行動に馴染めない児童の存在にも注目し始めていた。アーティストは、アトリエとしてお借りしている教室を、そうした児童が気持ちを落ち着かせるための場所として機能していることも後に知ることになる。

それから数日後、おそらくその二つの発見を踏まえて、『うちゅう人のまえならえ』という作品を制作した。人型に切り取られたうちゅう人たちは、児童や先生の体のシルエットにかたどられたもので、全身緑色に着色された。そして、背丈の大きなものも、小さなものも、目の位置で串刺しにされた状態で「前ならえ」をしている。誰が大人で誰が子どもかはもはや区別をなくした存在として佇んでいる。
休み時間には、5体1組にユニット化された作品をみんなで担いで練り歩いたり、文字通り一列に前ならえをしてみたりと戯れる。アーティストにとってこの作品は、あくまでもパフォーマンス作品と言い切る。背の順で並ぶ児童達に対して、目の高さで並ぶうちゅう人がとてもユニークに見えていた一方で、とても奇妙な姿に映ったのは私だけだろうか。

その後アーティストは、3年1組に展示されている実物の習字や、個人の目標などが書かれたカードなどを黙々と模写したり、自身が使用しているアトリエに串刺しのままのうちゅう人達を配置したりして、最終的に『コピー3年1組』という作品を制作した。（実はうちゅう人は、3年1組の児童の人数と同じ数制作されていた。）
作品を見た人達のリアクションは様々で、作品を見て絶句する子もいれば、逆にはしゃぎ回る子もいる。「素晴らしいですね！」と絶賛する先生もいれば、「胸に突き刺さりました！」と感慨にふける先生もいる。異様な光景を生み出したことは間違いないが、子どもと大人の区別が曖昧なうちゅう人達が出入りする『コピー3年1組』が、どのような意図で制作されたのかは、アーティストが発見し注目した存在を手掛かりに、皆さんの推測にお任せしたい。

一つ言えることは、年齢、時間、行動など様々な決まりごとが凝縮された学校という特殊な環境の中に、極めて曖昧で不確定な存在を許容する場を生み出すことでしか救われない、あるいは証明できない何かがあったのだと推測する。
おそらく学校的には、デリケートな問題に触れられる部分もあり、表現の内容には慎重にならざるを得ない状況もあったはずだ。にも関わらず、様々な対話を重ねる中で、最後までアーティストの意思や考えを尊重していただけたことには改めて感謝したい。

いずれにしても、今回目の当たりにした活動や作品の数々は、アーティスト本人が子どもになろうとする意思がなければたどり着けない境地において生まれたことは確かである。その姿勢と態度は、これからの「おとどけアート」において学校との新たな向き合い方の一つとなることを私は確信している。

コーディネーター　漆 崇博

# 札幌市立手稲北小学校 × 斉藤幹男

## 活動を振り返って

自分にとって、9年ぶり2回目の「おとどけアート」となった今回の活動は、登校初日まで不安な気持ちでいっぱいでした。というのは、事前に活動プランを用意してそれをスタッフや学校側と共有し、最終的な作品の完成そして発表を目指すという、9年前の「おとどけアート」では当然だった、企画ありきで進めるという形ではなく、まずは登校して校内にいる時間の中で何を活動の軸にするかを見つけるという、前回の活動とは全く別の形のスタートだったからです。
それに加えて、自分を知ってもらうには、初日に自己紹介として子ども達や先生に今まで制作してきた作品を映像で見せるのが最も手っ取り早い方法なのですが、今回はそれもせず、どんな活動をするのか、その可能性をなるべく狭めずにやってみようというチャレンジがありました。

このように、初めての環境の中に入ってからプランを生み出すというやり方は、普段自分が住む土地を離れて数週間から数ヶ月滞在制作をする、”アーティスト・イン・レジデンス”という活動ではよくあることで、滞在を始めて数日間のうちに、作品の題材になりそうな、その土地で初めて出会ってひっかかりを感じたものを元に作品を作るという行為と、同じ未知数の魅力を持っています。

ただその一方で、小学校という通常はアート作品を制作、発表する場所ではないところに、何のプランも提示せず、自分のバックグラウンドや作品をほとんど知られていない状態で飛び込んでいくというのは、不安以外の何物でもありませんでした。実際に、普段制作には欠かせないノートパソコンやカメラを持参せず、ほぼ手ぶらの状態で校内に入った自分の心持ちは、アーティストというよりももっと真っ白な「?（はてな」な存在。自分自身でも校内にいる自分に違和感を感じるほどでした。けれども、その心もとない状態がプラスに転じたのか、何も持たない自分を何とかしたいと切実に思い、まずは子ども達に上靴を作ってほしい（当初は来校者用のスリッパを履いていたため）、そして活動場所となっている名前のない空き教室に、名前代わりの「アイコン」を作ってほしい、また、がらんとした空き教室に魅力を増やすために、理科準備室に眠っていた興味深い備品や先生自作のポスターなどを借りて展示したりと、今までのアーティスト活動ではしてこなかったアイデアが次から次へと浮かんできました。

今振り返ると、自分の経験則でできる映像やアニメーションの制作といった、いわば得意技を封じたことから、切羽詰まったが故に浮かんだ選択肢だったのかと思います。

また、見知らぬ大人のいる空き教室に子ども達（そして先生方も）が何度も来てくれるのは一体なぜなんだろうと。特に理由があるわけではなく、ただ何となくなのかもしれないけれど、その不思議さを抱えながら子ども達一人一人と接することはものすごく考えさせられるものがあって、たった2週間だけとはいえ、自分がこの教室にいることは子ども達にとってどんな効果があるのだろう?ここで過ごす子ども達はどんな活動をしてほしいのだろう?と頭の中でずっと考えていました。

最終的な成果として、何かを作るということをせずに、教室に来る子ども達それぞれが好きなことをする場所を作る、という方向性を定めてからは、完成を目指す時間的なプレッシャーがなくなったぶん一人一人の話をじっくり聞くことができました。絵を描くことが好きな子もいれば、時間をたっぷりかけて上靴を作る子、怖い話をするのが好きな子、漫才や踊りを披露してくれる子など、教室の中で自由な振る舞いがあちこちで起こっている状況を、余裕を持って楽しむことができました。子ども達は僕に対して（この人は何しにきたんだろう?）、僕は子供たちに対して（みんな何を求めて来てるんだろう?）と、互いに謎に思い合うことで対等な関係を築いていたのかもしれません。

そして、4年生の授業時間を頂いて行った、赤と緑の風船を大量に膨らませて教室をいっぱいにするという作業も、風船を膨らませるという単純作業に大人も子どもも上手い下手の差がないことが（教える）（教えられる）の立場のない対等な状況を作りました。またみんながそれぞれ好きな数だけ膨らませても良いとすること、自由で能動性のある時間を過ごせたらという狙いがありました。結果、数百個の風船で埋まった教室を見て、4年生みんなで過ごした時間がそのまま結晶化したような不思議な感慨が湧きました。

今回の「おとどけアート」にはもともと企画書もあり、思えばそれもずいぶん悩みながら書いたものでした。子ども達が興味を持って関わってくれるような、わかりやすい面白さがあるものを作りたい、だけどそれは僕が先頭に立って指導しながら作るのではなくて、子ども達が進んでアイデアを出して大人たちを引っ張っていってくれるようなものにしたい。とても矛盾していて難しい望みでした。結局、企画書はなしになり、登校してからのぶっつけ本番となりましたが、何も用意していなかった教室が初日から子ども達でいっぱいになり、最終日まで途絶えることなく遊びに来てくれたことは、初登校前の不安な気持ちや悩みを一気に吹き飛ばしてくれました。そんな気さくな状況を日々作っている小学校の先生方、職員の皆様、保護者の方々にとても感謝しています。そして、ノープランのアーティストを学校側が信用して受け入れてくれる環境を作ってきたおとどけアート実行委員会に再度感謝をしています。

斉藤幹男/Mikio Saito
（アーティスト）

1978年札幌市生まれ。2000年、早稲田大学第二文学部表現芸術学科卒業。2002年、シュテーデル美術大学（フランクフルト、ドイツ）に進学、2007年卒業。マイスターシューレ（博士号）取得。　手描きの絵によるアニメーション、写真、CGなど様々な種類のイメージを組み合わせ、アナログ・デジタル双方の魅力を引き出す映像作品を主に制作し、国内外のギャラリーや美術館等で作品を発表している。2009年より札幌を拠点とし、市民参加型のワークショップ形式の作品制作や音楽家とのコラボレーション、映像以外の分野での発表も積極的に行っている。近年参加した主な展覧会に「Tooth Fairy Museum」（A4美術館、成都、中国、2019）、「札幌国際芸術祭2017」、「Keelung Ciao」（基隆、台湾、2017）、「パラピリオの森」（舞鶴、2016）など。

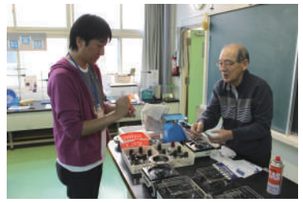
# アーティストがもたらした関係性

「おとどけアート」は事業が始まって10年目を迎え、毎年新しいアーティストと活動を行ってきた。そんな中で今回、手稲北小学校に通うことになった斉藤さんは、「おとどけアート」の活動に携わるのは2回目。これは昨年度から実践している、過去に参加したアーティストの再参加の試みである。アーティストが1回目と2回目を別々な小学校で同じ方法を用いて活動を展開したときに、小学校の状況が異なっている場合にどういった要素が生まれるのか、また、アーティストの学校を捉える目、思考にも変化は表れるのか、私自身もそういったことに興味があった。

斉藤さんの1回目の活動は、まだ「おとどけアート」事業が始まったばかりの頃で、あらかじめプランを実施校と共有した上で活動を行う形式で行った。当時は映像作品をつくる活動を行ったので、一定数のシーンの撮影が不可欠で、活動後半はスケジュールに追われてしまう面もあった。

そういった1回目の様子を踏まえ、今回、斉藤さんと重ねた打ち合わせでは、いくつかプランを挙げて頂きながらも、最終的には、実際の活動に入ってから、無数の可能性をできうるかぎりニュートラルな状態で捉えられるよう、あえて白紙に近い状態にして活動を迎える方針となった。明確に目的を設定しそれに向けてワークを行うと、活動自体がわかりやすくなるのだが、その一方でその時その場で起こる不確定な要素に対して柔軟性を担保することが難しくなってしまう。とはいえ、1度経験のあるアーティストならば尚更、この方針をとることはプレッシャーも大きく、きっと心中は穏やかではなかっただろうと想像する。

活動初日にはアーティストが過去にどういった作品を作ってきたか、あるいはどんな活動をこの学校でしていくかを話す、自己紹介のような機会を設けることが多いが、今回は子ども達がアーティストに対し「この人はこういった作品を作ってくれる人なんだ」という先入観を持つことを避けるため、それすらも行わず、文字通り体一つで活動を始め、1回目とは異なる方向からのアプローチとなった。



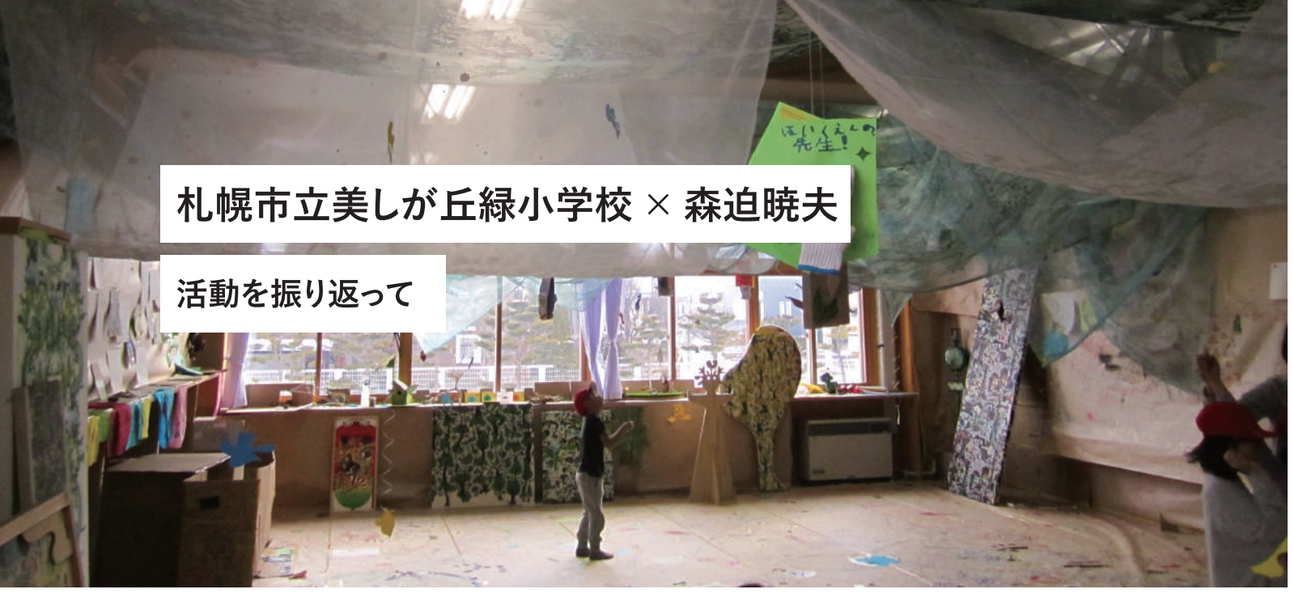
実際の活動を通して印象的だったのは、アーティストと子ども、もしくはアーティストと先生といった1対1のコミュニケーションで築かれたそれぞれの関係性が、まるで並列されたタイムラインのような形で、同時に進行しているように感じられたことだった。斉藤さんが自分の上靴を作ってくれるよう子ども達に呼びかけたり、活動場所の「アイコン」を考えてもらったりをすること通して、日々の中で徐々にそのタイムラインの数が増えていき、ある一つのタイムラインに複数人が巻き込まれていったり、別々のタイムラインだったもの同士が交わったりと、アーティストを中心にそれが広がっていく。そんな様子を見ていて、それぞれのやりとりの続く先には何があるのだろうかと、期待や不安をないまぜにしながら見てみたいと思った。側で見ていてもそのような気持ちになるのだから、アーティストや子ども達といった当人達はより強くそれを感じていたはずで、だからこそそれが継続的に活動場所に訪れる動機ともなっていたのではないだろうか。

また、もう一つ印象的だったことを挙げるならば、アーティストが自身の手を動かすこと、自身の表現を極力しないという選択をしたことである。これは、上靴作りと「アイコン」作り、いずれも、そこから子ども達が持っている魅力を見出す仕掛けとしてのお願いであり、どんなものが良いのか考えるのも子ども、実際に作るのも子ども、といった具合に、子ども達が自分で魅力的な表現を見つけると同時に、アーティストのためにそれぞれ技巧を凝らして一生懸命に何かを作る、というそのホスピタリティに感動した。
また、最終日に先生から頂いた授業の時間で、6年生に向けて自らの作品を見せるまで、一切自身の表現を見せることをしなかったというのは、「おとどけアート」のこれまでの参加アーティストの中でも稀有なことであり、アーティスト本人の挑戦となったはずだ。

最終的にアーティストは、誰の目にでも見える形で作品と呼ばれるものを制作したわけではなく、個々との関係性の中で見出した魅力的な要素、違う学年に面白い一面を持った子がいること、毎日会っているのに知らなかった先生の意外な特技、などいずれももともと学校の中にあったものが混在した場をそこに作ろうと試みた。そこに学年学級や、子どもと先生という区別すらも超えた新たなプラットフォームの存在が垣間見え、今までになかった価値観や関係性を生み出すような可能性があることを予感させてくれたように思う。

最後に、1回目とは全く逆ともいえるアプローチで、学校におけるアーティストのあり方を提示してくれた斉藤さんと、何事にも柔軟に対応していただき、また色々なお話を聞かせてくださった手稲北小学校の教職員の皆さまに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

コーディネーター　杉本直貴



# 札幌市立美しが丘緑小学校 × 森迫暁夫

## 活動を振り返って

もう、しばらく経ってしまいましたが、「おとどけアート」の体験は色濃く、自分の中に残っていくと思います。きっと今後も忘れることのない、素晴らしい体験だったと思っています。

僕はこれまで主に展示をするというスタイルで制作活動をしてきました。それは、はじめイラストレーターや、絵本作家のような、いわゆる絵を描いて生業をたてるというところからはじまっています。絵を描くということが好きでそうなっていきましたが、絵を描く職業というのは、大概制約が発生します。むしろ制約あっての職業というところがあるようにも感じます。
そんななか、自分の絵を貫き通している方ももちろんいらっしゃいますが、それは極々一部で、世の中の仕組み的にはプロなんだったら描きたくなくても描くのが職業。という感じになっている気がしています。僕自身、今でもイラストの仕事をしている中で、そこは否めないと思っています。ですが、今では無理なくできるようになりました。それは、仕事だから仕方がなくやっているというところももちろんあるのですが、表現することの本質や、考える楽しさに出会ったからだと思っています。

職業として絵を描くコトをやっていくのは、いろいろと制約が厳しく、自由に絵が描けません。そんなことを考えて制作しているうちに、気がつけばアートと呼ばれるような制作が主になっていきました。僕にとってこの二つはまったく、大きな違いがあって、ただ要望されたものをどんなに描けなくても描く。ということと、たとえ描くのがどんなにいやでも、自分でどう考えてどんなふうに描くか？という違いです。

僕は非常勤講師をしていますが、近頃の学生さんをみると、形の良いもの、一目で美しいと思うもの、など、いわゆる”うわべ”が優先的になってしまっている気がしています。綺麗なもの、規律が取れているもの、みんなが同調しているものが良い、そのように考えるはとても悲しいことだと思うのです。

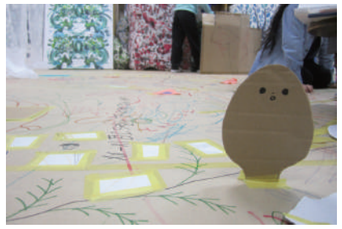
小学校に約30年ぶりに入って、はじめの印象は、素晴らしいの一言に尽きました。先生方は、一人一人の子ども達にしっかりと目を配っているし、子ども達もみんな素直で明るくきちんとしているコばかり。ほんとに素晴らしいと思いました。

けれども、同時に、なにか恐ろしさのようなものも感じました。 みんなが右にならえをすることができる素晴らしさ、その中にとてつもない怖さを感じました。世の中の風潮として、特に近年外れたことを出来ない空気みたいなものがあるように思います。そこに学校のみんなも準じているようでとても不安になりました。小学校に入って、そんなことを感じたので、まず、いろいろな年代の人にアンケートを取ることにしました。自分が小学校の時に、どんなことを感じて、どんなふうに生活してきたか？それを取ってみてわかったことは、美術や、芸術方面に来る学生さんは、みんな、どこかトラウマのようなものを抱えていて、「勉強や、運動や、人付き合いは苦手だけれども、お絵かきだけはずっと好きなんです。」と答える子ばかりで、僕自身、を省みてもそんなところがあると思いました。
ただ、自分の時代と圧倒的に違うところとして、今はインターネット環境が発達して、”情熱が情報に変わってきてしまっている”ところなのかと思います。自分の心から信じるものがゲームのキャラクターだったり、アニメのキャラクターだったりする。そして、それに賛同してくれる人がいくらでもTwitterの中にいる。SNSを通じれば、いくらでも自分の愚痴を発表して、聞いてくれる人がいる。デジタル技術の進歩によって、色を塗ることが上手にできなくても瞬時に機材が綺麗に塗ってくれるし、いくらでも簡単にやり直しが効きます。別にリスクを背負わなくても、本質を掘り下げなくても、簡単に発表できるし、削除も出来る。最高ですが、個人的にはそこにとても危機感を感じています。

そんなことを考えながら、アンケートと同時にまずやったことは、自己紹介でした。単純にまずは僕がどんなことをして生きてきているのかを見せたいな、と思ったのと、活動している場所に作品が増え続けて行って、なんか不思議なところが出来たけど、それが瞬間的に無くなるという衝撃を作りたかったからです。今考えると、壊したいという気持ちがあったのだと思います。それと、具体的には、与えてくださった場所にクラフト紙張り巡らせて、マジックや、色紙、ハサミ、テープなどを置いて、なにをしても良い、落書きし放題、放っとき放題な空間をつくりました。

「おとどけアート」の依頼をいただいた時、僕は、いろいろなことを感じて、考えすぎる、いわゆる過渡期に入っていました。お話をいただいた時、そのことを素直に言ったところ、「むしろそのまま小学校に入って、何もできなければ何も作らなくていいです。」と言われました。そんな風にお仕事を振ってもらえる環境は、なかなかありません。というか初めてでしたので、不安ながらもありがたく受けることにしました。で、自己紹介から始まったわけですが、ほんとにその後のプランは全く無く、展示を主な制作としていた僕としては、自己紹介という展示が全てで、ひたすら毎回作品を運び続けました。大変でした（笑）。展示が全てでしたが、そんな中、何もしなくていいって言っても、何か、形に残るモノをできないか？と考えながら小学校に通いました。

たくさんたくさん考えて、やれることをやってみようと、自分の専門であるシルクスクリーンをやったり、コンセプトから考えて凧作りをやったり（あ、これはしっくり来てたけどボツにされました（笑）！似たようなコトをやってる人がいるということでそうなりましたが、結果としては、ボツで良かったなとほんとに思いました！）、小学校の子ども達がやっている課題を自分もやってみたりなど、思いついたことを、やれることを一つ一つやっていきましたが、どれもどこかしっくりきませんでした。ただ一つ、自分が小学校を活動の場として与えてくださっていた場所では、自己紹介として、とにかく今までの自分の作品も増やしてましたし、シルクスクリーンで作った旗とか、凧とか、思いついたことの全てはそこにあって、とにかく色々なモノが増えて



いきました。クラフト紙は落書きの嵐で、置いておいた画材、素材も全てめちゃくちゃになっていて、すごくカオスな空間になっていたのが、とても面白かったです。そこで、そこに作られた落書きやら、なんだかわからないモノにお返事をしていきました。めちゃくちゃに描かれたモノへのお返事。具体的には、好きに何かを描き足していったのですが、次の日にはまたすぐにめちゃくちゃになってる。そこにまたなんらかのお返事をする。それはとても面白いことでした。
正直に言うと、何も作らなくても良いよ！と言われて入った小学校は、はじめはとても苦痛でした（笑）。何か作らなければいけない、というプレッシャーがあったからです。けれども、不安ながらも苦し紛れにやったことにちゃんと反応があることはとても面白いなと思っていました。けれど、何かねらってできないか？ということも常に考えて暮らしていました。

試行錯誤して、最終的に自分の制作の形として腑に落ちたのは、「オクラホマミキサー」をみんなで踊りたい！ということでした。自分が小学生だった時のちょっとしたトラウマだったフォークダンス。女の子と手を

△学校のいたるところに設置した森迫さんの作品をひとつひとつ紹介した冊子を作成。最終日には、1年生に向けたギャラリーツアーも行った。

繋げなかったり、踊りを踊らされるのがとても嫌だったことを、ここで克服したい！今だったらできる！という、とても個人的なプランでした。そんなコトを制作にしたことはなかったので、自分の中ではとても不安でしたが、純粋に面白いのではないか？と思いました。よし！これは面白い！と思って、ちょこちょこと先生方や、来てくれる学生さんに声をかけ、最終日の朝の全校放送（テレビを通じて全学年の子ども達が見てくれる朝の朝礼。自分の時代には無かったので衝撃でした（笑））で、その宣伝もして、満を辞して最終日の自由時間に臨みました。

最終日のその時間、本当にたくさんの子ども達が自分の与えられた場所に来てくれたので、そこでガンガン音量を上げて「オクラホマミキサー」を踊ろうとしました。けれども子ども達のはしゃぐ声で音がかき消され、落書きを継続してやる子、シルクスクリーンで旗を作りたい子、ただ大はしゃぎしたい子、画材と一緒に置いておいた楽器や、道具（下駄とか置いてました（笑））を引っ掻き回す子、などなど全くコントロールできない環境がそこにありました。何もあやつれない（笑）わ！！大変だ〜！と思うと同時に、子ども達は本当に素晴らしいな！と思いました！結果として、何をやったか？やれたのか？ということについては、なーんにもできなかった！ということなのかもしれませんが、そこにとても満足感と可能性を感じることができました！ほんとは、モノづくりとしてはダメなのかもしれませんが（笑）。
今のご時世にたくさん、これをやってはいけないとか、こうするべきだとか、そういった抑圧や同調をかき消すことが少しでもできたのかな？と思います。絵を描くこと、モノを作っていくことの本質は”考えること”と、”考えないでやってしまうこと”なんだなと、とても感じさせてくれる場でした。社会の中で、これが生業になっていく人がどんどん増えて行ったらいいなと思います。落書きが得意な子、まとめるのが得意な子、壊すのが得意な子、作るのが好きな子、おしゃべりが好きな子、黙って見てるのが好きな子、そこに入りたいけれど入れない子、などなど、あらゆる全ての子がいて成り立っていた空間で、社会の中の大人も子どももそんな風になっていくといいのになってココロから思うような、感動がありました。そんなことを感じさせてくれた「おとどけアート」は、自分にとって、忘れ難いものになったと思います。アーティスト だけでなく、美術や芸術に全く関心がない方も、もし小学校に戻れたら、改めて感じることがきっとたくさんたくさんあると思いました。どんな環境でも、時代でも、子ども達はハツラツとしていて、それを大人も一緒になって感じられる環境が、今後の世界が平和になっていくのではないかな？と思いました。おとどけアート。素晴らしい体験でした！ またやりたいです！

最後に。大変よくしてくださった美しが丘緑小学校の先生方、良い先生ばかりで、甘えっぱなしでした！心から感謝しております。特に1年生の授業にはたくさん呼んでいただき、ほんとに楽しかったです！美しが丘緑小学校の子ども達みんなにもとっても感謝です！みんなとても素直で素敵な子ども達ばかりでした！制作場所のお隣の特別学級の子達は、お隣ということもあり、とても仲良くなれた気がしています。学級のお二人の先生も暖かくしてくださり感謝しかありません。どうもありがとうございました！必ずまた遊びに行きたいと思います。
そして、おとどけアートのコーディネーターさん。作家にとってコーディネーターの存在はとても大きな存在だと思いました。悩んだり楽しんだりを一緒にできる。コーディネーターもアーティストだと思いました！心強かった、ほんとに感謝しています。
これからもおとどけアートが続いていくと良いなと、切に思います。

森迫暁夫/Akio Morisako
（イラストレーター・美術家）

1973年長野生まれ東京育ち、札幌在住。2009年、倉敷芸術科学大学大学院通信制芸術研究科修了。北海道テキスタイル協会会員。「sprouting garden〜萌ゆる森〜」（札幌、芸術の森、2014）、「つながろう展」（札幌、地下歩行空間、2015）、「ウォーターフロート展」（東京、ペーターズギャラリー、2016）、「CONNECTERS」（札幌、ル・トロワ、2017）、「シャイシャイン展」（札幌、大丸藤井セントラル スカイホール、2018）、「生えたての道草」（札幌、hato coffee、2019）、「飛生芸術祭/TOBIUCAMP」（白老、旧飛生小学校、初年度より参加）他、イラストの仕事多数。

# 「おとどけアート」とは何なのか？

年に一度の記録集ということもあり、せっかくの機会なので「おとどけアート」についての説明も含め、コーディネーターとして、寄り添ってきた森迫さんの活動を振り返りたいと思う。（長くなります）

まず、概要でも触れているように、「おとどけアート」は外部講師によるデリバリー授業というような活動ではなく、一定期間に渡ってアーティストが小学校の一員として通い続けるという、全国でも珍しい活動となっている。というのもこの活動は「アーティスト・イン・レジデンス（以下AIR）」という、ヨーロッパで生まれたアーティストの支援プログラムを基礎として組み立てられているからだ。このAIRというプログラムは、アーティストに創作活動の場や制作活動に必要な自由な時間を提供するもので、アーティスト達はこれを利用して様々な国や地域に赴き、自身のスキルアップやキャリア形成につなげていく。その一方で、アーティストを受け入れる側の団体や地方自治体には、創作活動を支援することを、芸術によるまちづくりや地域振興に結び付けようとする傾向がある。というのも、アーティストがその場に暮らし制作活動を行うことで、地域の人々の交流が促進されたり、思わぬ地域資源を発見することがあるからだ。こうしたAIRの小学校版となるのが「おとどけアート」（別名/アーティスト・イン・スクール）なのだ。
※AIRに関して詳しくは以下をご参照ください。「我が国のアーティスト・イン・レジデンス事業の概要」萩原康子（社会法人企業メセナ協議会）http://air-j.info/resource/article/now00

しかしながらこの活動はいまいち分かりにくいのが難点である。具体性のある内容のワークショップや特別授業の方が、効果や結果が分かりやすいため、小学校としても受け入れやすいのだろう。実際、この活動を始めた当初は開催校を探すのに非常に苦労した。そういう状況もあって「おとどけアート」黎明期においては、「最終日に向けて○○を作ります」というようなゴールを提示し、「アーティストと子ども達が協働してアート作品を作るんだな」と先生方にも想像しやすい形で実施してきた。そうやって何とか開催校を確保しながら、試行錯誤を繰り返し、細々とではあるが気付けば十年以上も続く活動となった。そして今では「おとどけアート」という活動を聞いたことがある、経験したことがあるという先生達が増えてきたこともあり、2016年度より札幌市内で実施校を公募するにまで至った。すると「必ずしも何かを作らなくてもいいし、アーティストとの交流が子ども達の記憶に残ればそれでいい」といった本来の形を理解してくれる学校も出てきたのである。これによって、作品を作るタイプの活動もあれば、交流をベースとした活動もあるというような、幅のある「おとどけアート」を実施することが可能となった。

次に、一緒に小学校に入っていくことになるアーティストには、アーティストとしての面白さや人柄はもちろんのこと、小学校という場に興味があったり、子ども達と交流をしてみたい、という人にお願いをしている。そして小学校に入ったら、何かを発表したり、成果物を作らなくちゃいけないなんて思わずに、まずは肩の力を抜いて、できる限りそこで出会った人たちと交流し、毎日楽しみながら過ごして欲しい、とまるで子どもを送り出す親のようなお願いをしている。とはいえ、アーティストとは表現者であり、何かを発信したい人たちなので「何もするな」といっても大体、何かを始めたがるのが性分だ。アーティスト達のほとんどが数十年ぶりに小学校に入ることになるので、昔を

思い出しながらも、子ども達の為に何かできることをしてあげたい、伝えたいという気持ちで一杯になる。しかしながら、「おとどけアート」は休み時間を基本として交流活動を行うため、アーティストには溢れんばかりの伝えたい想いが一杯あるのに、子ども達はといえば座って話を聞いてくれるわけではなく、あっちこっちをうろうろしたり、挙句には途中でいなくなったりと、想いと現実のバランスが釣り合わないことがよくある。そんな経験をしてアーティストは気付く。授業であれば子ども達がそこにいて耳を傾けてくれるが、「おとどけアート」はそうではないんだと。彼らの主体性にすべてを委ねる休み時間に交流を行うというのは、そういうことなのだと。不特定多数の子ども達を相手にするのではなく、一人一人と向き合い、焦らずにじっくりと時間をかけて友達になるしかないのだと悟るのである。これこそが、一定期間小学校に通うことで可能となる、「おとどけアート」の目指す交流の形であり、この事業の本懐なのだ。

さて、やっと森迫さんの活動について。10月から12月の中旬まで、毎週のように美しが丘緑小学校にやって来た森迫さん。アトリエを子ども達が自由に遊べるようにしたり、様々なワークショップ体験も行ったり、授業にもお邪魔したりといろいろなことに挑戦した。自己紹介として実際に持ち込まれた作品は数十点にも及び、「家で眠っているよりは触ってもらったほうがいい！最悪、壊れても・・・」という決意で、日々子ども達と向き合っていた。（実際に数点の作品が壊れてしまったが、「子どもが怪我しなくて良かったねー」と笑顔だった。その度量に感謝！）この三か月間に関しては、どんな美術館やギャラリーよりも森迫暁夫の作品に文字通り「触れる」ことのできる空間が存在していた。そして何より、それらの作品を生み出した本人である森迫さんと、直接話したり遊んだりすることができたということが重要だ。公募の際の学校に向けたアンケートに「当活動に期待すること」という欄がある。そこには必ずといっていいほど、「本物のアーティストに出会える機会を作りたい」といった旨の内容が書かれている。確かに日常生活において、アート作品というモノを目にする機会はあるけれど、それを制作している生身の人間であるアーティストに出会える機会は滅多にない。だからこそ、今の時代において「出会いの場を創出する」という意義は大きい。

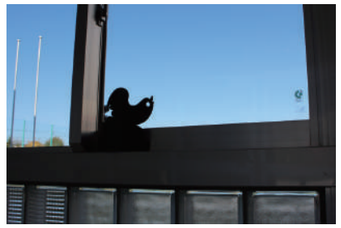
そしてその出会いについて私達は「・・・交流を通じて新たな価値観や多様な人生観に触れることで、創造力が刺激され世界を広げるきっかけとなりえる」というようなことをよく書くのだけれど、それは決して子ども達への一方向的な作用ではない。実は子ども達以上にアーティストもまたたくさんの刺激を受けているのだ。アーティストが芸術という文化を背負っているのと同様に、小学校もまた教育機関という異なる文化を持っている。大人になってから実際の教育現場に通える機会などほとんどなく、これはアーティストにとっても非常に貴重な体験となるのだ。そして何より貴重なのは、子ども達との交流である。彼らと話をすると、今流行っているものとか好きなもの、親や兄弟の話、時には愚痴や悩み事といった、どうでもいいような話を聞くことになる。しかし、その言葉の一つ一つにしっかりと耳を傾けていると、そこには瑞々しくも生々しい「子ども達の今」が表れているのに気付く。彼らはまだ未熟だからこそ柔軟で、親や友達、先生といった人との関わりや、家や学校などの生活環境から大きな影響を受ける。彼らから発せられる言動や振る舞いこそが、現代社会を色濃く映し出しているものなのだ。

このように、日常の些細な交流の中で共有された情報は、ゆっくりではあるが互いの世界を変えていく。それはまるでグローバル化や多様性を受け入れながら変容してゆく社会のようであり、新たな科目や教育法を取り入れながら既存の制度を更新していく小学校のようでもある。そして今回の活動では、森迫さんのアトリエこそが、何よりその変化を可視化したような場所だった。無地のクラフト紙や段ボールで囲まれた床や壁面に、子ども達が思い思いに絵を描いてゆく。アーティストの作品をまねて自分オリジナルのアート作品を飾る子、人の絵の上に落書きする子、森迫さんが作った段ボール製のキノコをひとつ残らず踏みつぶす子。日々やって来るこうした子ども達の手によってこの空間は変化し、そしてその変化に応えるように森迫さんもまた、このスペースに作品を持ち込んだりするなど、手を加えていった。時には子どもが夢中になり過ぎて、それが創作ではなく破壊のように見えることもあったけれど、できる限り子ども達一人一人の活動を許容していた。

森迫さんは、アトリエの責任者として、怪我や事故が起きないようにルールや約束事を決めることはできる。危険という負の可能性に対して「〇〇禁止!!」と子ども達の活動に制限を設けることもできたが、なるべくそれをしなかった。それは森迫さんの子ども達との一貫した関わり方であった。これは放置ではなく見守る、ということだと思った。昭和から令和にかけてまだ荒削りだった社会は、制度やルールの整備によって洗練され丁寧になった。それによって、良くも悪くも昔できなかったことが今はできるようになって、昔できたことが今はできなくなっている。この状況に善悪の判断を下すのではなく、そういった変化に対してどう向き合うかが重要なのだ。中にいる人たちを無視してルールや制度が先行すると、容易にその場は柔軟性を失う。潤いを失った場所に魅力はない。日々の変化を受け入れながら、それに合わせて場の在り方を更新していくのはとにかく労力がいるし大変だ。だけどそこにこそ、創造的な活動につながるチャンスが転がっているのだと思う。子どもたちの手によって変化した(荒れ果てた)アトリエを掃除しながら、そんなことを思った。この場と時間を提供してくれた美しが丘緑小学校のみなさんと、付き合ってくれた子ども達、支えてくれた先生達、そして最後まで頑張ったアーティストに感謝。

最後に。「おとどけアート」は札幌市内の小学校を対象としてすでに30校以上で実施されてきた。そしてこの活動を通じて1万人以上の子ども達と出会ってきた。当事業に関わって以来、学校が変わる度に声を掛けてくれる先生もいる。2度目のチャレンジがしたいと参加表明をしてくれるアーティストもいる。関わりを持った一人一人のあの瞬間、あの時が、しっかりと積み重なっているのだ。そして、これからも新たな出会いによってこの事業は変化していく。コーディネーターという立場として、これからも「おとどけアート」の今を書き残していきたいと思う。

コーディネーター　小林亮太郎



## おとどけアート実行委員会について

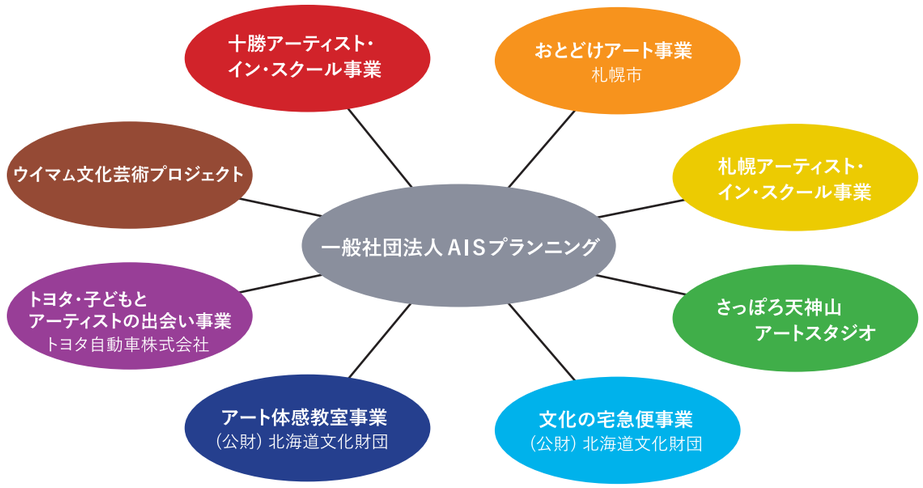
2008年設立。会員数12名。美術教育や社会教育の研究者(北海道大学など)、市内小学校教職員、文化団体職員、アーティスト、学生などの市民で構成。事業のコーディネートを担う事務局(一般社団法人AISプランニング)からの提案を受けて、アーティストや開催校の選定、実施プログラムに対するアドバイス、活動現場のサポートなどを行なっています。おとどけアートの活動を通じて子ども達が豊かな感性と多様性を学び、地域の人々とのつながりを活性化、促進することを目指しています。

## 一般社団法人AIS(アイス)プランニングについて

おとどけアート事業の事務局として活動のコーディネートを担う一般社団法人AISプランニング(*1)は、学校、文化施設、商店街、公園など生活に身近な環境に注目し、アートを媒介として、人々の新たな関係性が構築されていくきっかけを生み出す活動を展開しています。北海道内の様々な団体・地域・事業との連携によるアーティスト・イン・スクール事業の企画・運営をはじめ、アーティスト子どもに関する全国各地の取り組みを紹介する「アーティスト × こども(*2)」サイトの運営や、アーティストの活動を支える文化施設の管理運営なども行なっている団体です。

*1…一般社団法人AISプランニング　https://ais-p.jp/

*2…アーティスト×こども　https://artists-children.net






# 2019年度アーティスト・イン・スクール関連事業

## ウイマム文化芸術プロジェクト
## 白老町立白老小学校×加賀城匡貴

ウイマム文化芸術プロジェクトが主催する2019年度事業の一環として実施したアーティスト・イン・スクール事業(コーディネート:AISプランニング)。白老町で初めての開催となった今回は、ステージパフォーマンス「scherzo(スケルツォ)」のほか、映像作品やカードゲームを発表している加賀城匡貴さんが、白老町立白老小学校にて活動を行いました。環境調査員に扮したアーティストが、小学校や周辺地域の環境に潜む特徴的な物事を調査し、活動の最後に「scherta(スケるた)」というカルタを開発しました。

開催期間　2019年11月12日(火)〜11月22日(金)
参加人数　教職員28名、児童300名
活動場所　学習室／校内／体育館／グラウンド／大町商店街など

主催　ウイマム文化芸術実行委員会、文化庁
ウイマム文化芸術プロジェクト
https://uymam.localinfo.jp/posts/categories/
アーティスト　加賀城匡貴　https://scherzosketch.com/

## さっぽろ天神山アートスタジオ冬季国際公募AIRプログラム s(k)now
## 札幌市立本町小学校×ADRUNNOGNT/アドルウント

撮影 小牧寿里

さっぽろ天神山アートスタジオ(所管:札幌市/管理運営:AISプランニング)の冬季国際公募AIRプログラム「s(k)now」(企画:小田井真美/さっぽろ天神山アートスタジオプログラムディレクター)の一環として実施しているアーティスト・イン・スクール・プログラム。AISプランニングが培ってきた地域ネットワークとコーディネートスキルを活用して、招聘アーティストが札幌市内の小学校に一定期間通いながら小学校を一時的なスタジオに見立ててプロジェクトを行っています。今年度は、公募で選ばれたアーティストユニット アドルウント(アーノント・ノンヤオ/タイ、ユン・ヌエン/ベトナム)が、札幌市立本町小学校へ通い、s(k)nowのテーマとなっている「冬・雪・北方圏」に因んで「デコ・ソリ」(学校の日常の中で採取した音を発する音響機材や、子ども達や先生へのインタビューなどから構成された映像を投影する機材で装飾されたソリ)を開発。最終日には、完成したデコ・ソリを校内の廊下や体育館、雪で覆われたグラウンドに走らせ子ども達や先生、保護者にお披露目し交流しました。

開催期間　2020年2月3日(月)〜2月21日(金)
参加人数　教職員19名、児童316名
活動場所　空き教室／校内／体育館／グラウンドなど

主催　札幌市、一般社団法人AISプランニング
さっぽろ天神山アートスタジオ
https://tenjinyamastudio.jp/2019-2020-sknow.html
アーティスト　ADRUNNOGNT　https://www.arnontnongyao.com/

# おとどけアート&関連事業活動実績

**札幌市(49)**

2006年10月2日(月)〜10月6日(金)・14日(土)
札幌市立清田小学校 × 加賀城 匡貴(ステージパフォーマー)

2007年1月22日(月)〜2月2日(金)
札幌市立山の手南小学校 × 野上 裕之(彫刻家)

2007年2月5日(月)〜2月16日(金)
札幌市立有明小学校 × 石川 直樹(写真家)

2007年11月26日(月)〜12月7日(金)
札幌市立新陵東小学校 × 宝音&図布(版画家)

2008年2月4日(月)〜2月15日(金)
札幌市立新光小学校 × 河田 雅文(美術家)

2008年11月10日(月)〜11月21日(金)
札幌市立太平小学校 × 高橋 喜代史(美術家)

2009年1月26日(月)〜2月6日(金)
札幌市立幌西小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)

2009年11月4日(水)〜11月13日(金)
札幌市立屯田南小学校 × 今村 育子(現代美術家)

2010年2月8日(月)〜2月24日(水)
札幌市立北小学校 × 東方 悠平(現代美術家)

2010年10月12日(火)〜12月3日(金)
札幌市立清田小学校 × 長谷川 仁(美術家)

2010年11月8日(月)〜11月19日(金)
札幌市立福住小学校 × 斉藤 幹男(彫刻家)

2011年1月19日(月)〜2月4日(金)
札幌市立常盤小学校 × 富士 翔太朗(画家)

2011年2月7日(月)〜2月19日(土)
札幌市立旭小学校 × 片岡 翔(映画監督)

2011年9月26日(月)〜10月15日(金)
札幌市立稲積小学校 × 小助川 裕康(美術家・庭師)

2011年11月28日(月)〜12月16日(金)
札幌市立あいの里西小学校 × 冨田 哲司(現代美術家)

2012年1月17日(火)〜2月3日(金)
札幌市立みどり小学校 × 山本 耕一郎(現代美術家)

2012年8月20日(月)〜9月6日(木)
札幌市立石山東小学校 × トムスマ・オルタナティブ(現代美術家)

2012年10月1日(月)〜10月13日(土)
札幌市立富丘小学校 × 本田 蒼風(アート書家)

2013年2月1日(金)〜2月15日(金)
札幌市立もみじの森小学校 × 小川 智彦(ランドスケープアーティスト)

2013年8月20日(火)〜10月4日(木)
札幌市立資生館小学校 × アサダワタル(日常編集家)

2013年9月1日(日)〜12月24日(火)
札幌市立北陽小学校 × 佐藤 隆之(芸術家)

2013年10月1日(火)〜10月12日(土)
札幌市立三里塚小学校 × 加賀城 匡貴(ステージパフォーマー)

2014年2月10日(月)〜2月21日(金)
札幌市立北陽小学校 × 風間 天心(芸術家/僧侶)

2014年8月20日(水)〜12月6日(土)
札幌市立北陽小学校 × 加賀城 匡貴(ステージパフォーマー)

2014年9月16日(火)〜9月26日(金)
札幌市立元町小学校 × ダムダンライ(芸術家)

2014年11月4日(火)〜11月15日(土)
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報体)

2015年2月9日(月)〜2月20日(金)
札幌市立山鼻小学校 × 持田 敦子(芸術家)

2015年9月1日(火)〜11日(金)、2016年2月23日(火)〜26日(金)
札幌市立星置東小学校 × 永田 壮一郎(音楽家)

2015年11月2日(月)〜2016年2月18日(木)
札幌市立栄東小学校 × 小町谷 圭(メディアアーティスト)

2016年1月19日(日)〜2月13日(土)
札幌市立平岸高台小学校 × 黒田 大祐(美術家)

2015年6月18日(木)〜12月24日(木)
札幌市立北陽小学校 × halle(アーティストグループ)

2015年10月21日(水)〜2016年2月26日(金)
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報体)

2016年10月3日(月)〜10月22日(土)
札幌市立鴻城小学校 × 山崎 阿弥(声のアーティスト)

2016年12月6日(火)〜12月16日(金)
札幌市立西岡小学校 × 深澤 孝史(美術家)

2017年1月23日(月)〜2月17日(金)
札幌市立苗穂小学校 × 進藤 冬華(美術家)

2016年11月22日(月)〜12月2日(金)
札幌市立月寒東小学校 × 長谷川 仁(美術家)

2016年4月27日(水)〜2017年3月24日(金)
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報体)

2017年10月24日(火)〜11月8日(水)
札幌市立拓北小学校 × まるみデパート/梶高慎輔、梶高果代(アートユニット)

2017年11月17日(水)〜12月1日(金)
札幌市立有明小学校 × 東海林 靖志(舞踊家)

2017年12月1日(金)〜12月14日(木)
札幌市立山の手小学校 × 川上 りえ(美術家)

2018年1月22日(月)、25日(木)、2月1日(木)〜13日(火)
札幌市立澄川南小学校 × ミッシェル・アンジェリカ・カビルド(アーティスト)

2018年9月18日(火)〜12月25日(火)
札幌市立ひばりが丘小学校 × 上ノ 大作(陶芸家、造形作家)

2018年10月30日(火)〜11月9日(金)
札幌市立西園小学校 × 永田 壮一郎(音楽家、作曲家)

2018年11月13日(火)〜11月27日(火)
札幌市立本町小学校 × 中島 佑太(アーティスト)

2019年1月22日(月)、25日(木)、2月1日(木)〜13日(火)
札幌市立澄川小学校 × マドゥ・ダス(アーティスト)

2019年10月1日(火)〜12月16日(月)
札幌市立美しが丘緑小学校 × 森迫 暁夫(イラストレーター、美術家)

2019年11月11日(月)〜11月22日(金)
札幌市立手稲北小学校 × 斉藤 幹男(アーティスト)

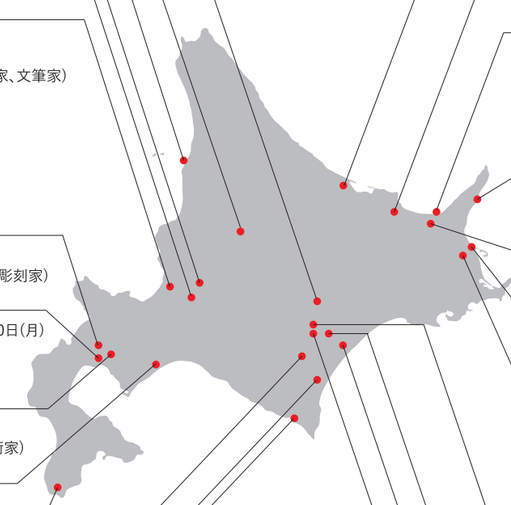
2019年11月25日(月)〜12月13日(金)
札幌市立もみじの丘小学校 × 松田 朕佳(アーティスト)

2020年1月22日(月)〜2月20日(木)
札幌市立本町小学校 × アドルウント(アートユニット)



主催及び関係事業一覧

- おとどけアート事業
- 札幌アーティスト・イン・スクール事業
- さっぽろ天神山アートスタジオ
- 文化の宅配便事業
- アート体感教室事業
- トヨタ・子どもとアーティストの出会い事業
- ウイマム文化芸術プロジェクト
- 十勝アーティスト・イン・スクール事業



**士幌町(6)**
2006年12月4日(月)〜12月15日(金)
士幌町立北中音更小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)

2008年7月23日(水)〜8月1日(金)
士幌町立佐倉小学校 × 磯崎 道佳(彫刻家)

2007年8月27日(月)〜9月7日(金)
士幌町立佐倉小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)

2008年10月6日(月)〜10月17日(金)
士幌町立北中音更小学校 × 平原 慎太郎(ダンサー)

2007年10月1日(月)〜10月12日(金)
士幌町立北中音更小学校 × 荒川 寿彦(太鼓奏者)

2009年8月24日(月)〜9月11日(金)
士幌町立北中音更小学校 × タノタイガ(現代美術家)

**旭川市(1)**
2017年12月16日(土)、17日(日)
旭川市民文化会館 × 石川 直樹(写真家)

**羽幌町(1)**
2009年6月30日(火)〜7月1日(水)
羽幌町立天売小・中学校 × 石川 直樹(写真家)

**美唄市(1)**
2012年8月16日(木)〜8月17日(金)
アルテピアッツァ美唄 × 石川 直樹(写真家)

**岩見沢市(1)**
2012年10月13日(土)〜10月14日(日)
岩見沢駅構内 × 長谷川 仁(美術家)

**石狩市(1)**
2018年9月3日(月)〜9月5日(水)、
12月3日(月)〜12月7日(金)
石狩市紅南学校 × アサダワタル(音楽家、文筆家)

**湧別町(1)**
2020年1月27日(月)〜1月31日(金)
湧別町立芭露学園 ×
アサダワタル(音楽家、文筆家)

**大空町(1)**
2013年11月21日(木)〜22日(金)
大空町立豊住小学校 × 石川 直樹(写真家)

**斜里町(2)**
2014年7月14日(月)〜15日(火)
斜里町立朱円小学校 × 石川 直樹(写真家)

2014年8月8日(金)〜16日(土)
斜里町立西竹小学校 × 長谷川 仁(美術家)

**羅臼町(1)**
2017年8月22日(火)〜8月27日(日)
義務教育学校知床ウトロ学校 ×
アサダワタル(音楽家、文筆家)

**ニセコ町(1)**
2006年1月22日(月)〜2月2日(金)
ニセコ町立ニセコ小学校 × 磯崎 道佳(彫刻家)

**清里町(1)**
2017年12月14日(木)、15日(金)
清里町立清里中学校 × 石川 直樹(写真家)

**豊浦町(1)**
2006年11月7日(火)〜11月17日(金)・20日(月)
豊浦町立大岸小学校&鉱山分校 ×
磯崎 道佳(彫刻家)

**標津町(1)**
2017年1月11日(水)、1月12日(木)
標津町生涯学習センターあすぱる ×
石川 直樹(写真家)

**真狩村(1)**
2012年1月12日(木)〜13日(金)
真狩村立真狩小学校 × 長谷川 仁(美術家)

**中標津町(1)**
2019年7月23日(火)〜7月28日(日)
中標津町立俵橋小学校 ×
アサダワタル(音楽家、文筆家)

**白老町(1)**
2019年11月12日(火)〜11月22日(金)
白老町立白老小学校 ×
加賀城 匡貴(ステージパフォーマー)

**音更町(2)**
2005年8月22日(土)〜8月26日(月)
音更町立音更小学校 ×
ゴウヤスノリ(ワークショップ・プランナー)&
松本 力(映像アニメーションアーティスト)

**松前町(1)**
2010年9月27日(月)〜28日(火)
松前町立松城小学校 × 石川 直樹(写真家)

2008年9月1日(月)〜12日(金)
音更町立東士狩小学校 × wah(参加型表現活動集団)

**大樹町(1)**
2010年10月25日(月)〜11月5日(金)
大樹町立大樹小学校 × 荒川 寿彦(太鼓奏者)

**帯広市(4)**
2005年1月24日(月)〜2月4日(金)
帯広市立大正小学校 × KOSUGE 1-16(美術家)

**幕別町(1)**
2007年2月20日(火)〜3月2日(金)
幕別町立途別小学校 × 祭太郎(パフォーマー)

**中札内村(1)**
2011年11月21日(月)〜12月2日(金)
中札内村立中札内小学校 ×
遠藤 一郎(未来芸術家)

2006年2月6日(月)〜2月10日(金)
帯広市立花園小学校 × 杉浦 圭太(俳優)

**浦幌町(2)**
2009年10月26日(月)〜11月6日(金)
浦幌町厚内小学校 × 石川 直樹(写真家)

**様似町(1)**
2013年7月29日(月)〜8月3日(土)
様似町立様似中学校 × 長谷川 仁(美術家)

2006年2月18日(土)
帯広市立大正小学校 × クニ 河内(音楽家/作曲家)
&野田 美佳(音楽家/打楽器奏者)

2011年9月20日(火)、21日(水)、
11月23日(水)〜25日(金)
浦幌町立厚内小学校 × 石川 直樹(写真家)

2007年9月18日(火)〜9月28日(金)
帯広市立広陽小学校 × anti-cool(パフォーマー)

札幌アーティスト・イン・スクール事業
おとどけアート2019
主催　おとどけアート実行委員会
後援　札幌市教育委員会
支援　札幌市
協力　札幌市立美しが丘緑小学校
　　札幌市立手稲北小学校
　　札幌市立もみじの丘小学校
　　さっぽろ天神山アートスタジオ
コーディネート　一般社団法人AISプランニング

札幌アーティスト・イン・スクール事業
おとどけアート2019記録集
発行　おとどけアート実行委員会
協力　ウイマム文化芸術プロジェクト
　　札幌市立美しが丘緑小学校
　　札幌市立手稲北小学校
　　札幌市立もみじの丘小学校
　　さっぽろ天神山アートスタジオ
寄稿　斉藤幹男
　　松田朕佳
　　森迫暁夫
企画・編集　一般社団法人AISプランニング

おとどけアート実行委員会事務局
一般社団法人AISプランニング
〒061-3212　北海道石狩市花川北2条6丁目209番地
TEL 070-5600-8466　FAX 0133-74-1065　E-mail　info@ais-p.jp
事務局担当(小林)　TEL 070-5288-5367　E-mail　ryotaro@ais-p.jp
HP　https://ais-p.jp

活動スタッフ随時募集中！
おとどけアートをもっと知りたい、活動に関わりたいという学生や、一般の方々を対象に活動スタッフの募集を行っています。事前準備や打ち合わせから関わりたい方から、小学校での活動に参加したい方まで、幅広く募集をしています。また実際の活動だけでなく、おとどけアートに関する説明なども行っています。一緒に活動を盛り上げたい、興味・関心がある方はぜひご連絡ください。過去の活動はブログからご覧いただけます。
http://inschool.exblog.jp/ または「おとどけアート」で検索！